

祝園部隊回顧

岩 里 稔

はじめに

時代は変わり、人の心は変われど、変化のないのは過去現実の体験である。

精華町という祝園部隊、有名な弾薬庫の所在地である。

高齢で浅学非才な自分が乏しい記憶を手繰り、四十有余年の過去の祝園部隊を省みて世人の物笑いになるのも覚悟のうえで、この拙い文を書くために筆を執つたのは、自分が元工員であり僅かな自分の体験が町史の資料に若干でも寄与出来れば幸甚だと思つたからである。

一、祝園部隊の発足

当時の陸軍省は、何の目的でどのような作業をするのか、広域な場所がなぜ必要であつたか、戦争終了後も工場そのものが存立するのかなどまったく町民に不明にしたままこの平穏な農村、我が郷土に突如として起工され



祝園部隊本部前

たのである。これは、当時の軍部主権の特筆すべき事である。

昭和十二年日中戦争（日華事変）勃発、三月初旬、枚方禁野の兵器貯蔵弾薬庫が不幸にも何かの原因で爆発、同倉庫は位置場所が狭小であり、かつまた場所が被害度も大なるを考慮してその代替地を精華町の地に求めたため、広大な地域が必要視され、東西南北一里四方約二百八十二ヘクタール（二千八百五十三反）の郷土が買上げされた。

位置は北稲・南稲両地域の西方、東畑地域北東の土地に決まった。その土地は田畑や山林といった農村にとつては掛けがえのない先祖代々伝わった重宝な土地であったが、秘密裡に計画が進行していた。

突然に昭和十四年十一月、陸軍用地として正式に申し出があり買上げとなった。

いくら国策とはいえども相談もなく町民の了解も得ず、父祖伝来の土地を取り上げるため捺印を強要されたことは憤懣このうえもなく、非難反対を胸中に秘め、ただ黙々と時代の流れに従い哀惜の情涙とともに了解の印を捺した。

買収の評価は、当時にして高からず低からずの線だとは思われるが、現在の価格から見ると破格の感がある。葉書一枚一銭五厘が大の男の値打であったことを思うと仕方が無いのかもしれない。

田一反歩………五百円

谷間の下田……………	百五十円
畑……………	百五十円
山林……………	百円

二、隊内の構図

田畑の耕作地や柴刈りの山林などの減反で、地域の若壯者がほとんどその道に就職、大阪陸軍兵器補給廠、並びに宇治分廠に分かれ、業務見習いに入職した。

後日、祝園兵器補給廠が祝園部隊に改名された。主管建設工事は陸軍経理部の遠大な計画のもとに、作業は大林組が請負い、着手した。

入門は表正門・南門・西門の三方所からで、衛兵所の立哨地・守衛所は表門・南門も同じ、西門は立哨地と守衛所の距離二百メートルであった。

表門からの道路幅五メートル道路に沿って材料倉庫が林立しモータープール、運搬自動車、東二十メートル鉄道線路、表門より南方四百メートルの小高い丘に部隊本部・事務所・隊長室の中心地、事務所西北方百メートル先きに診療所、事務所南側百メートルの間に衛兵所・消防所・工員休憩所と作業に関係の無い建物が並立していた。

正面道路表門より南八百メートルの地点に二百メートルもあるプラットホーム着送駅、輸送線は確実に完備された。



昭和 43 年ごろの祝園分とん支隊風景

並んでおり、作業場中心地に工員休憩所があった。建造物は広域なため点在するものかなりの数であったことを覚えている。

三、作業の内容

昭和十六年四月、いよいよ始業。初工員は大阪本廠ならびに宇治分廠より帰還、準備は完了したが作業は一体

弾薬倉庫は永久に保持されるトンネル式地下倉庫（コンクリート建物の上に盛り土をしたもの）で、空中からは絶対に分ならず距離も相当に広域で安全視される位置に建設された。

倉庫数については忘却し定かではないが谷間と谷間に建設され、爆破の配慮もあつてか完全な倉庫であつたと思う。

臨時倉庫は簡単な建物二十カ所ほどが西門付近に在り、広域な場所のため一巡するのにもかなり時間が掛かつた。

ボイラー室、簡易水道（地下水汲上げ、水量豊富）、火薬溶填場は三棟あり、門口百メートル奥行三十メートルと広域な建物、前面は小運動場に似た広場があつて火工場の周囲は築堤で囲まれ、道路からは屋根の上だけが見えた。

表門付近は炊事調理場、挺身隊や勤労学生の宿舎、幹部職員官舎が建ち

何をするのか。

総指揮官部隊長・千田静飛虎陸軍砲兵中佐、幹部職員兵技将校五〜六名、同下士官七〜八名、以下、職長・班長、男女工員、勤労学徒で組織された。

まずは、戦地へ砲弾、弾薬を輸送する補給廠。

前項に記した溶填場作業場において火薬をボイラーの湯で溶かし、その液体を弾筒に入れる作業。

ほかの火工場では弾丸信管を別個に分けて木箱に詰めたあと釘打ち作業、完装出来た製品を日通が請負い作業で輸送駅に運搬、第一戦地へと輸送。

溶填作業は重点作業であり、濃度糧目等は熟練工、補佐役は女子工員、作業は一週間で交代した。小銃の弾丸は取扱いなしで高射砲弾や手榴弾が主だった。兵器製造所では無く、弾薬を主とした弾薬庫作業が第一であったため、常駐の憲兵が陰に目を光らせていた。

四、工場内の雰囲気

遂に十二月八日、大東亜戦争の火蓋は切られ、世は軍政下、男子工員の多数は動員に就き、工員補充は女子に求められるようになっていった。

和歌山からは女子挺身隊、学徒動員として京都烏丸商業学校、女子は大谷高等女学校の生徒たち。

学業中途の勤労学徒は表門西側の簡易宿舎に宿泊、日夜、先生ともども勤労の汗を流していた。

各種団体も勤労奉仕の名のもとに活躍、三千人の出入りを数える日も相当あった。



勤労学徒の記念写真

戦地への輸送に事欠かさぬよう労働確保には万全を期されていたのである。危険作業とはいえず気まますます発揚され、作業中の事故傷害は少なく軍民工場でありながら家庭的雰囲気溢れ、活気ある作業が続いた。それは多分、近郊農村出身の純朴な工員が幹部職員にいたことや、「勝つ迄は……」の精神が部隊の中に漲っていたためでもあるろう。

ただ一回だけ五年の間にボヤ失火の不祥事があった。これは、第二浴填場から出火、原因が不明で燃え易い火薬が満杯で、近隣の倉庫には弾薬が積載されているため、もし火の洗礼を受ければ死傷者・犠牲者の多いのももちろんのことでもあり、火薬爆発と聞いて凄然となった。が、指揮官隊長以下各幹部職員、現場工員らの必死の働きが効を奏し、見事、難を免れた。これが一回限りの失策であった。なお、この失火に対し千田部隊長は泰然自若、大難の前に冷静沈着、落ち着いた統率振りには抜群であり衆目された。隊長は全工員の信望厚く慈父のような感情の湧く軍人であり、一女工員、一学生に対しても愛情深く、家庭的な雰囲気、気風は、鹿児島出身の人柄を示すものとみなが言ったものである。昭和十九年三月名古屋補給廠長大佐として栄転された。戦後、旧工員男女有志が「祝友会」という同窓会を設け、年一回、精華町の「酔月」という料亭で会合を持っているが、その都度五十人ほどのものが集まるのである。部隊を偲び隊長を慕うこの会も四十五回を数えた。これが継続することは多分に隊長の偉大な人徳を示すものである。

五、終戦時の模様

戦争も終局に近づきB 29の編隊機が空中を占有し、連続の警報で作業の能率が上がらず、食事も一汁一菜の疎食となつていった。南瓜・茄子・芋の蔓に甘んじ、食べざかりの青少年は耐え難き苦難を忍び、黙々と働く茨の道は当時の日本の常であつたように当部隊も同じであつた。

その当時の部隊の作業は円型三十センチメートルの湯たんぽ同様の陶器に二キログラムの火薬を詰め込み、軽易な地雷を作製していた。それらは敵兵上陸に際し沿岸に布設し迎撃に使用することので、屋外に積載されてあつた。

戦局は敗戦の色濃く、グラマン戦闘機二回の空襲があり、幸い被害軽微で終わった。

経理部建設部門では倉庫増設などの建設作業が続いており、大林組作業員（朝鮮人七割、日本人三割）五、六十名が正門・南門より出入りして働いていた。人員不足もあり竣工目前に敗戦の憂きめにあつた。そのころは弾丸入庫ゼロの倉庫がめだつた。また、作業員の不足、資材の欠乏と難局が続き、柵外の飯場内も異常を呈して来ていた。

六、部隊の終局

国を挙げて忘れ得ぬ八月十五日、その日も部隊内では作業が続行されていた。午前十一時、全工員集合の命令は下りる。ただならぬ気配に全員緊張。沈痛なる古賀隊長の訓話、悲痛な終戦の詔勅、陛下の声聞きがたく、全員声もなく、人前であることさえ忘れ国家の宿命に泣く。全工員、涙無くしては語れない愁嘆場であつた。

また、一方、苦役より解放された個々の感情、喜怒哀楽の表情は戦いが終わったという安心感と蟬の脱殻の感があった。

勤労学徒の面ざしにも親兄弟と会えるのだといふどこかホツとしたところも見受けられた。戦争は罪なものである。

衛兵勤務の兵士、白布で包まれた銃剣を肩に肅々と正門を去る。皇国陸軍最後の姿を目の当たりに見たとき、万感胸に迫り筆舌に尽くせぬ感慨に耽った。全てが悲劇として印象に残る。

兵器補給廠祝園部隊の終末は何を語る。

祖国愛に苦役の汗を流し、何等報いの無い結末。十字架を背負った国民の運命であり、宿命であった。

祖国敗戦の憂き目を直感した折り、柵外の朝鮮人労務者飯場内では歓喜歓呼の大合唱が聞こえてきた。濁酒に酔った歓声は民族独立の叫び声であつたらう。祖国を思慕する情念……………

敗戦国民の我が祖国を憂う心情とは相反する立場であれど、祖国を思う情熱には変わりが無い。

七、終戦後の祝園部隊

九月初旬にはほとんど解除解散、幹部士官始め工員の姿は消え去って行った。空虚な部隊となり、現役士官二人、警備員十五名ほどが廢墟に残留。

米國駐留軍進出に備えて特筆すべきことは倉庫の爆破作業であろう。進駐軍の命で巨額を投じた地下倉庫を爆破。敗戦の憂き目は静寂なる谷間にまで監視の目を届かせ、十トンの火薬の威力は健固な倉庫も瞬時に廢墟と化

し、無残な姿を露呈した。

途中で下令が変更になり、結局、五、六カ所の倉庫が犠牲になったが、残存の倉庫は現状通り保存された。爆破の際、山火事が起こり少人数で消火にあたったことが印象に残っている。

昭和二十一年三月、弾無き、人無き廃屋に別れを告げた。まるで昨日の事のような気もするのである。